平成２８年　福岡県立光陵高等学校　光陵祭文化部合同企画

第６回北部九州地域環境シンポジウム　海、山、里とわたしたち

～地域の人々によりそったまちづくりから考えるこれからの“ふくつの自然環境”～

日程　１２月１０日（土）　福津市文化会館２Ｆ大研修室（カメリアホール）１３：００～１７：００

目的・内容

２０１４年から始まった北部九州地域環境シンポジウムも今回で６回目となった。第２次福津市環境基本計画策定の一環として、世界と地域をつなぐ様々なゲス・スピーカーの方々から自然と人間との関わりについて興味深い講演をしていただいてきた。また高校生や大学生、そして地域住民がふくつ e-café において職業、世代、国籍を超えて自由に意見を交換するなど非常に学びの多いシンポジウムである。我々が日頃忘れがちな自然との関わりを様々な立ち位置から考え、次の世代にこの豊かな自然環境をいかにして引き継いでいくか、それぞれ異なる立場から行動を始める契機となることを願っている。

今回はまず世界に目を向けるため、ゲストスピーカーとして国連ハビタットの職員ラリス・ランカティレケ氏を迎えた。彼は自然災害によって住居をなくした住民と対話しながらコミュニティを再生した貴重な体験を持たれている。そして福津市のコミュニティからは九州工業大学環境デザイン研究室、水産高等学校、光陵高等学校の学生、生徒に加えて、４０年以上にわたってふくつの海と里の自然の保全に尽力されている藍の会保存会の柴田富美子さん、津屋崎に移住されて様々な人と人をつなぐ活動をしてある NPO 法人地域交流センター津屋崎ブランチの山口覚さん、津屋崎に移住される人々に住環境を提供してある暮らしの問屋の古橋範朗さんなど実にバラエティに富んだ顔ぶれとなった。それぞれの方々の発表、講演を受けて、ワールド・カフェ形式で市民が参加する意見交換会も実施された。

開会・挨拶

発表「ふくつの自然環境と環境保全への取り組み」

九州工業大学環境デザイン研究室　伊東　啓太郎教授

北部九州地域環境シンポジウムのこれまでの歩みや地域住民と共に考えてつくられた第二次環境基本計画も間もなく完成を迎えることが紹介された。
ノルウェーでの環境教育の現状や自然に寄りそったライフスタイルから私たちも学ぶべきことがたくさんあることを指摘していただいた。

発表「豊かな海づくり project- t　～放置竹林の経済的な有効活用～」

水産高等学校

アクアマリン科が取り組んでいる project-t は福岡県の豊かな海づくりを代表する取り組みである。実際に竹魚礁に海のいきものが卵を産み、次世代を育んでいる様子を見て、感嘆の声が挙がった。豊かな海づくりには豊かな山づくりが不可欠であるという視点は皆で共有していくべき大切なものであることを改めて感じた。

発表　「わたしたちの考える生物多様性～Cirencester とふくつの場合～」
光陵高等学校

６月に５年ぶりに福津市の海岸にうみがめが産卵に戻って来た。今年度の課題研究のテーマを「生物多様性」に設定し、グループ研究をすすめた。環境アイコンを活用し地域住民が生物多様性の保全に先進的に取り組んでおられる英国のサイレンセスターそこでは”Hare（野うさぎ）”が街のあちこちに出没し、多くの観光客を全英から集めている。この動物愛護のチャリテイをヒントに福津市でも「うみがめ」を環境アイコンにチャリテイ事業をふくつ環境トラストの中で実現していきたい。

発表「ふるさと　津屋崎への想い」　柴田　富美子さん

津屋崎で４０年以上にわたって生活をされてきた柴田さんは、津屋崎に自生していて姿を消してしまった草花の絵やご家族の貴重なプライベート・ムービーを使いながら私たち参加者をタイムスリップさせてくださった。

津屋崎の浜にはごみなど全くなく裸足で歩くことができ、夕食のおかずは浜辺で拾った魚であったこと。海辺で煮炊きするにも、火をおこす材料も食材も全部自然界にあったことをお話いただい。その様子は自分の子供時代を思い出し、懐かしく感じたり、まるで映画を観ているように思ったりと様々であったが、確実に身近な自然が姿を消しつつあることに危機感を覚えた。

発表“People's Process for Environmental Sustainability”
国連ハビタット　上級人間居住専門官　ラリス・ランカテイレケさん

国連ハビタット上級人間居住専門官ラリスさんの英語によるプレゼンテーションを伊東先生が同時通訳で参加者に内容を伝えた。

日本も地震や津波など自然災害が多い国でまさに６年前の東日本大震災の復興の最中であるが、ラリスさんが取り組まれていたスリランカは民族紛争の絶えない国である。紛争の中で失われた村を住民との話し合いを土台に再生されたエピソードは想像を絶するものであった。私たち福津市が行っている市民参加のシンポジウムも参考にすべき点がたくさんあった。行政まかせにしない、住民が主役のまちづくりのヒントを得ることができた。

発表「自然環境と暮らし」　山口　覚さん

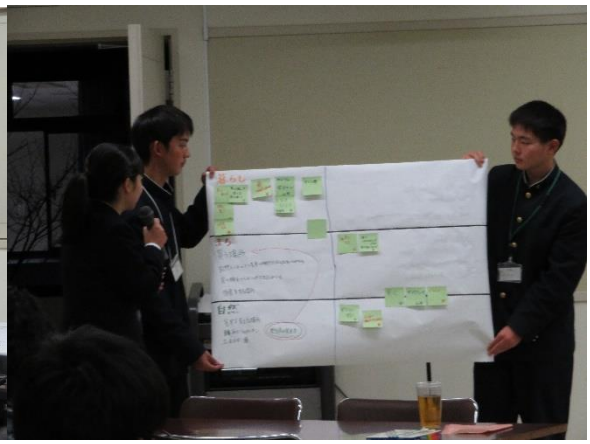
福津市津屋崎に住居を移し、全国の人と様々なものをつなぐ事業を展開してある山口さんのプレゼンテーションのスライドに使われている写真に感銘を受けたものが多かった。また、都会の暮らしと田舎の暮らしでは自然の見え方が全く異なること、便利さを追い求めると何か大事なものを失うこと、一方、便利なことを少しだけするとたくさんの大事なものを手に入れることなどが生徒の心に響いたようであった。日頃、田舎で暮らしていて私たちが気づかないあたりまえの幸せについて考えさせられた。

意見交換会　ふくつ　e-café　　「ふくつの生活環境～自然と人と共にある暮らし～」
ファシリテーター　暮らしの問屋　古橋　範朗氏

ふくつの市民と高校生、大学生、大学院生とがふくつの自然について意見を交換するふくつ e-café では毎回異なるテーマでワールド・カフェを行うのが特徴である。今回は「暮らし」「町」「自然」というテーマからそれぞれが思いつくものを付箋に書き、模造紙に貼ってグループの意見としてまとめた。これは現在の教育現場ではアクティブ・ラーニングの一手法として行われているものである。

本校生徒は日々の授業では同年代のクラスメイトとしか意見は交換できないが、このふくつ e-café では異世代、異業種の多様な大人の方々と教科の枠を軽々と超えたテーマについて話し合う。したがって最初は緊張し、何も意見を言うことができないと思っていたようであるが、回を重ねるうちに、発表される意見には正解はないこと、他の人と違う視点をもつことが大切であること、自分の意見と異なる意見もきちんと尊重するべきことなど多くの気づきがあったようである。

グループ発表



時間の関係上、２グループがふくつ e-café で行った意見交換について発表した。ふくつの暮らしの中に人々の暮らしと自然が隣り合わせになっていること、柴田富美子さんの浜辺で魚を拾って夕食で食べていたというエピソードから約３０年の間に福津の自然環境にものすごい変化が起こっているに対する驚きを本校の２９年度生徒海外研修に参加する予定の１年生が発表したのが印象的であった。

まとめ　うみがめ課宮本課長より挨拶

これまでの北部九州地域環境シンポジウムの歩みが第２次福津市環境シンポジウムに集約されていることへの感謝とそれが新たに考えられた「ふくつ環境トラスト」の中でシンポジウムは今後も続けていきたいという希望を語られた。